



# 犬の夢

---

青春

---

春日信彦

---

## いいかげんな英語

糸島中学の教頭は九州独立運動の主犯格だ、と総理はCIAから聞かされ、彼女を探るように指示された。政府転覆の策謀の情報が取れ次第、人間に戻してやるとの約束で、CIAから犬に変身できるTPP薬を飲まされ、CIA 作員とともに糸島中学に出立した。柴犬の子供に変身した総理は、秘かに糸島中学を偵察し始めた。最初に、最も人気があると云うバーバラ先生の授業を盗み聞きすることにした。

超ミニスカのバーバラ先生は、篠田教頭が嫉妬するほど生徒たちの人気者となっていた。バーバラ先生の人気の一つは、ハリのあるプリリンとしたお尻が見えるほどの超ミニスカにあったが、それだけではなかった。授業がとても破廉恥でセクシーだったからだ。必ずと言っていいほど、セックスの話をしてきたからだ。生徒たちは、その話を聞きたくて、必死になって授業を受けていた。特に男子生徒は、生唾をゴクンと喉に流し込みながら、目を輝かせていた。

バーバラ先生は、糸島中学で圧倒的な人気を誇っていた。新一年生たちの間でも、バーバラ先生の超ミニスカの話題があちこちで勃発していた。今では、バーバラオツカケと言うユニットが誕生し、それは、バーバラ先生を追っかけては、バーバラ先生が階段を上るときには、階段の下で正座してプリリンのお尻を覗くのだった。また、下りてくるときには、同じように正座して、ショーツがチラッチラッと見える股間にじっと目を据えるのだった。この行為は、決してとがめられることはなく、バーバラ先生は、笑顔で股間を見せていた。

英語の授業は、いたって好評だった。バーバラ先生が受け持つ授業の成績は、群を抜いて好成績だった。その秘訣は、生徒の性的興奮と英語をリンクさせることだった。当然、教頭は猛反対であったが、教頭の指示にはまったくお構いなしに好き放題に授業を進めていた。教室に近づいてくるバーバラ先生の足音を聞くだけで、2年A組の生徒たちは興奮し、目を輝かせて、ドアを開けるや、生徒たちは拍手で迎えた。茶色の柴犬は、バーバラ先生が教室のドアを閉めるのを見届けて、そっと、ドアの前にお座りすると、小さな耳をそばだてた。

「Everyone」いつものようにバーバラ先生は、色っぽく明るい声でみんなに声をかけた。「英語は楽しいかな～、今日も元気よく、英語を話しましょう。Let's enjoy speaking English. それでは、質問から始めようか。質問がある人。Any questions?」呼びかけに答えて、木村君が手を挙げ、即座に質問を始めた。「初体験は、いつですか？」木村君は、いつもバーバラ先生の私生活に関する質問ばかりをしていた。

バーバラ先生は、恋愛とセックスの話が大好きだった。「ダイレクトな質問ね。そうね、14歳だったかな。相手は、高校1年生」バーバラ先生は、くねらした腰に左手を当て答えた。生徒たちは、納得したように頷き、即座にノートにメモした。「他には？If you have any questions, please raise your hand.」笑顔で質問を促した。中村君が手を挙げ、質問した。「今、彼氏いますか？」

バーバラ先生は、笑顔で答えた。「います。彼は、28歳で、黒人です。5年間付き合っています」生徒たちは、あっけにとられていたようだったが、全員即座にメモをした。中村君は、メモし終わると、即座に立ち上がり質問を追加した。「遠距離恋愛ですか？」中村君は、彼氏はアメリカにいたと思った。「いいえ、彼は、福岡に住んでいます。だから、いつでもデートできます。先生、ドンドン、裸にされちゃうわね。ハハハ」バーバラ先生は、笑い声を上げた。

「宿題をチェックしましょう。みんな、want toの例文を書いてきたかな。それでは、順番に発表してもらおうことにします。今日は窓側から行きますか。浅田さんからね」浅田さんは、ノートを手に取り立ち上がった。「I want to live abroad. どこでもいいので、外国で暮らしてみたいです。できれば、ニュージーランドで羊を飼ってみたいです」先生は、頷き、「将来、夢がかなうといいですね」言い終わると後ろの吉田君に眼を向けた。

「I want to have a dog. 犬を飼いたいです。でも、マンションでは犬を飼ってはいけないことになっています。大人になったら、一戸建ての家に住んで、たくさん犬を飼いたいです」先生は、少し気の毒そうに返事した。「今は、我慢する以外ないね。先生のところには、犬、猫がいます。とっても可愛いです。遊びに来てもいいですよ」吉田君は、頷き、笑顔を作った。

英語が得意な田中さんは、すっと立ち上がり、ノートを見ずに話し始めた。「I want to a good diplomat and be a bridge between Japan and foreign countries. 私は外交官になって、日本が戦争しなくていいように、各国と話し合いたいと思います。なぜ、戦争をするのか分かりません。戦争のない世界にしたいです」田中さんは、小学校のころから英語の塾に通っていて、すでに英検準2級を持っていた。田中さんの流暢な発音に感心した先生は、笑顔で褒めた。

「I' m sure your English will improve. Your future is bright.」

いつもエッチな質問をする木村君が、にやけた顔で立ち上がった。「僕には、たくさんwant toがあります。I want to be a professional baseball player. I want to go to karaoke with my friends. I want to see AKB48 live concerts. I want to have a girlfriend. I want to kiss. I want to sex.」木村君は、発表し終わると、ドヤ顔で腰掛けた。最後に響かせたセックスの発音には、みんな度肝を抜かれた。先生も予想はしていたが、さすがに顔が引きつった。

「Your English is good. Good job! たくさんできましたね。英語の上達は、気持ちとイメージです」セックスに冷や汗を流しながら、一応褒めちぎった。次に、のそっと肥満の高橋さんが立ち上がった。「I don' t want to study English. なぜ、英語を勉強しなければならないのですか？英語を使う仕事をしないと思うし、アメリカ人と結婚したいとも思いません。義務教育から英語を無くしたほうがいいと思います」話し終えた高橋さんは、ドスンと腰を落とした。

「必要性の質問は、必ず出てきます。高校、大学の受験科目に英語がありますね。だから、英語の勉強は必要なのです。なぜ、受験科目に英語があるのかは、分かりません。日本人は、中学、高校と受験のために英語を勉強しています。でも、ほとんどの人は、話せないし、ちょっとしたメールも書くことができません。とても、不思議です。だからと言って、英語の勉強が無駄といえるでしょうか？おそらく、勉強のやり方がよくないのだと先生は思っています。

先生は、使える英語をみんなに学んで欲しいと思っています。英語は、勉強じゃなくて遊びと思ってみてはどうか。これからも楽しくやっていきたいと思っています」話し終わると即座に水崎君が手を挙げた。「でも、受験のためにたくさんの単語を覚えなければならないじゃないですか。結局、遊びと思っても、つらいばかりで、面白くないと思います。受験科目から英語を無くせばいいんだ」ふくれつつらの水崎君は、みんなの同意を得ようと周りを見渡した。

尾崎君が声を張り上げた。「そうだ。英語なんて要らない。日本人は、日本語をもっと勉強すべきだ。日本人は、アメリカ人にならなくてもいいんだ」数人から、賛同の声が上がった。「そうだ、そうだ。英語はいらね〜」寺山さんがすっと立ち上がった。「私も英語は嫌いです。でも、遊びの英語だったら、いいと思います。父も母も受験のために英語を勉強したはずなのに、まったく話せません。中学校程度の英語も忘れています。受験英語は、無駄だと思います」

勢いよく田中さんが立ち上がった。「私にもはっきりした答えが出せません。でも、英語は必要だと思います。これからますます欧米人が日本で働くようになると思うからです。また、欧米人が経営する会社に就職する場合、英語は不可欠になると思います。自衛隊で英会話の特訓がなされていると聞きましたが、近い将来、米兵と一緒に戦場に行くということだと思います。日米安保条約とTPPがある限り、英語から逃げることはできないと思います。だから、英語が話せるようになりたいと思います」バーバラ先生は、田中さんの国際的な視野に感心した。

「みんな、英語は、勉強でなく、受験のためでもなく、単なる言葉遊びです。英語なんて、できなくても、ちっとも恥ずかしくありません。いいかげんな英会話でいいんです。楽しく、わいわい、遊び英語をやろうじゃないですか、みんな。憶えられる英語だけでいいんです。いいかな、みんな」バーバラ先生は、笑顔で生徒たちを見渡した。木村君が椅子の上に立ち、叫んだ。「楽しくやろうぜ。バーバラ先生は、世界一の先生じゃないか」みんなも、一斉に立ち上がり、「そうだ、そうだ」と大声を張り上げた。

「It' s almost time to stop. Remember your homework! Have a good weekend!」バーバラ先生が、授業終了の挨拶をしたとき、木村君は、椅子から机に飛び上がり、大きな声を発した。「今日は、レッドですね。先生大好きで～す！」バーバラ先生は、超ミニスカのお尻をフリフリして笑顔でドアに向かった。ドアに足音が近づくと、ドアの前で盗み聞きしていた柴犬は、すばやく駆け出し、男子トイレに隠れた。

## ディベート

篠田教頭が糸島中学に赴任して以来、ディベートが盛んに行われるようになった。世界を支配できる軍国主義九州帝国を建立するには、世界一の頭脳と詭弁術を子供たちが身につけなければならないと教頭は考え、ディベート授業を取り入れた。かねがね、教頭はCIAの陰謀力と詭弁術には感心していた。今、一番参考にすべき頭脳は、CIAだと確信し、世界支配のためには、CIA以上の陰謀論と詭弁術を生徒たちに教えなければならないと決心した。

教頭は、世界で最も優秀な民族は、ユダヤ民族と日本民族に違いないと考えていた。と言うのも、優秀な日本民族の祖先が、ユダヤ民族だからだった。さらに、ユダヤ民族は、歴史的に迫害を受けてきたが、日本民族の祖先がユダヤ民族であることが判明した現在、日本民族も迫害のターゲットにされると考えていた。また、CIAの狙いは、武力による知的民族の奴隷化で、特に、ユダヤ民族と日本民族の奴隷化を策謀していると考えていた。

戦後CIAが押し付けた日本国憲法と日米安保条約は、まさに、日本民族を奴隷化するための洗脳政策であり、すでに、日本の政治家は、CIAの手先と成り果て、日本民族を地獄に落とし入れようとしている。もはや、不正選挙で選ばれた政治家に国民の将来を預けることはできない。日本民族を存続させるために、沖縄からCIA軍事基地を排除し、核ビジネスに頼らない九州帝国建立のための独立運動をしなければならない、と教頭は職員会議で何度も叫んだ。



柴犬は、次の授業が始まるチャイムが鳴り響くと、1年のクラスが並ぶ1階に駆け下りた。廊下をうろうろしていると、元気な声がする1年C組のドアの前で足を止めた。一度周りを見渡し、このクラスの話盗み聞きすることにした。

ルーシー先生のクラスでは、女性にも徴兵制を科すかどうかの議論がなされていた。賛成派と反対派に別れ、自由に議論がなされていた。賛成派の高橋さんは、斬新的な意見を述べた。「女性は、戦争には向かないと言う考えは、迷信だと思います。現在の女性は、高学歴者も多く、知的にも、体格的にも、男性に劣らなくなっていると思います。確かに、女性は、体力的には男性に劣ると思いますが、鍛えることによって、筋力をつくと思います。戦略や、戦術に女性の知力をおおいに生かすべきだと思います。」高橋さんは、右腕を突き上げた。

反対派の松井さんは、冷静に穏やかに発言した。「女性は、大昔から女神として拝み奉られてきました。女性は、平和の神であって、戦争の神ではないと思います。女性は、家族を守り、子供を育てるのが勤めだと思います。戦争で戦死するのは、男性がふさわしいと思います。生物学的にも、男性は殺人を好むのだと思います。女性は、愛に生きる動物だと思います」松井さんの意見は、みんなを頷かせた。

賛成派の二宮君は、大きな声で手を上げ立ち上がった。「確かに戦争には、男性が向いていると思います。筋力もあるし、平気で殺人ができると思います。でも、女性もいざ戦場に出れば、男性と同じように殺人はできると思います。戦場は、愛を捨てるいい機会だと思います。日本民族を守るためには、男女機会均等法に従い平等に殺人をするべきだと思います。きっと、一人殺せば、気が楽になって、何人でも殺せるようになると思います」二宮君は、ドヤ顔で腰を下ろした。

反対派の渡辺さんは、目を吊り上げて立ち上がった。「二宮君の意見は、女性を侮辱しています。女性の愛は、動物的なもので、永遠に不滅なものです。戦場に送り込まれても決して愛はなくなりません。傷ついた兵士を見れば、きっと身を投げ捨てても、瀕死の兵士を介護すると思います。だから、女性に人殺しはできません。殺人は、男性のみがすればいいと思います」渡辺さんは、二宮君をにらみつけて腰掛けた。

賛成派の秋元さんは、大好きな二宮君を援護するため立ち上がった。「戦争は、男性だけのものと決め付けるのは間違いだと思います。正義のためには、女性も戦うべきだと思います。確かに、戦場で人を殺すことは怖いと思いますが、何人か殺せば慣れると思います。愛とは、民族を守るためにあると思います。女性もやればできると思います」秋元さんは、二宮君に笑顔を送った。

反対派の大野君は、大好きな渡辺さんの援護に入った。「戦争は、男性のものだと思います。歴史的に見て、女性は戦争に参加していません。本来、戦争は、男同士の殺し合いであって、女性や子供を巻き添えにすべきではないと思います。現在、多くの女性や子供たちが戦争で殺されていますが、この戦争は、正義の戦争ではないと思います。正義の戦争とは、男同士の殺し合いだと思います。女性は、おろかな男性を慰めるのが勤めではないでしょうか？」大野君は、腕を組んで腰掛けた。

次に、男女徴兵制が実施されたとして、軍隊での恋愛を禁止すべきかどうかの議論がなされた。さっそく、恋愛賛成派の宮沢さんが立ち上がった。「恋愛は、女性の命です。恋愛ができなければ、戦場には行かないと思います。恋愛は、戦争のモチベーションを高め、気持ちよく殺人ができる媚薬だと思います。戦場で、燃えるような恋がしたいと思います」宮沢さんは、好きな人と一緒に戦場にいる自分を思い浮かべていた。

恋愛反対派の松本君は、机をドンと叩いて立ち上がった。「恋愛は、言語道断です。恋愛をすれば、死にたくないと言う気持ちになって、戦場から逃げ出すと思います。恋愛は、軍隊の風紀を乱すと思います。万が一、妊娠するようなことになれば、戦場に出られなくなってしまいます。これでは、戦力が落ちてしまい、戦争に負けてしまいます。恋愛は、断固として反対です」松本君は、ガッツポーズをとった。

恋愛賛成派の柏木さんは、笑顔で立ち上がった。「男性は、女性をまったくわかっていないと思います。女性は、恋愛すれば強くなるのです。好きな男性ができれば、戦争に勝って、幸せな家庭を作りたいと思うものです。だから、恋愛は、母性本能をくすぐり、闘争心を高めるのです。ライオンで狩をするのはメスじゃないですか。恋愛のない軍隊なんて、大島のいないAKB 見たいなものです」意味不明のたとえで締めくくったが、なぜか、拍手が起きた。

恋愛反対派の相葉君は、まあ～まあ～と言いながら、周りを見回しながら立ち上がった。「みんな、恋愛は、団結心を失わせるんだよ。AKBだって、恋愛を禁止していたからこそ、今までやってこられたんじゃないだろうか。軍隊で恋愛すれば、きっと、どこかで逢引するに決まっている。軍隊の規則も守らなくなるし、二人で脱走するかもしれない。戦争より恋愛のほうが楽しいわけだから、きっと、男性は腑抜けになると思う。AKBのように恋愛禁止にすべきです」数人の男子が、そうさそうさ、と声を上げた。

恋愛賛成派の北原さんが、深刻な顔で立ち上がった。「歴史的に軍隊には、女性はいませんでした。いつも、女性は、戦場で暴行を受け、被害にあっています。それは、男性軍人が、恋愛できなかったからではないでしょうか。軍隊でも恋愛とセックスが許されたならば、戦場でのレイプはなくなると思います。正義の戦争は、愛をはぐくみながら行うべきものだと思います」大きな拍手が沸き起こった。みんなは、頷いた。

恋愛反対派の生徒も北原さんの意見に圧倒されてしまった。相葉君が好きな恋愛反対派の前田さんが立ち上がった。「確かに、北原さんの意見は、的を射ていると思います。でも、恋愛が許されたならば、きっと戦意が消失すると思います。戦争とは、殺人です。恋愛して、殺人ができるのでしょうか？確かに、戦場でのレイプは減るかもしれませんが、なくならないと思います。男性は、動物的にセックスが好きだと思います。本命の彼女がいても、浮気するじゃないですか」数人の女子が拍手した。

中学生の意見は、大人と違って、創造的であった。ルーシー先生は、大人に活気がないのは、CIAに洗脳されてしまったからだと思った。CIAが処方した日本国憲法と言う麻薬を喜んで飲んでしまった日本国民は、安楽死を受け入れる民族となりはて、また、「正義の戦争」で世界支配をもくろむCIAの手先となってしまった日本国民は、人間の尊厳を無くし、単なる奴隷として戦場に赴く運命をたどることになったしまった、と嘆いた。

## 覚醒

柴犬が元気溢れる議論に聞き入っていると、後ろから超ミニスカのバーバラ先生が声をかけた。「可愛い子犬！」バーバラ先生は、柴犬を抱きかかえると、ドアをそっと開け、教室に入ってしまった。「こんなところに、可愛い子犬がいたわよ。ほら」バーバラ先生は、両手で持ち上げみんなに見せた。ルーシー先生は、笑顔でドアまでかけていった。「あら、マジ、可愛い！みんな、クラスで飼うことにしようか？」みんなは、大声で「やった～！」歓喜の声を上げた。

生徒たちは、みんな喜び、この可愛い子犬をクラスで飼うことにした。柴犬は、逃げ出すわけには行かず、スタッフが助けに来てくれるまで、子供たちに面倒を見てもらうことにした。柴犬は、少しがっかりしたが、子供たちや先生たちの行動を確かめるいい機会と思い、愛想よく振舞う決意をした。1年C組のルーシー先生のクラスで飼われることになった柴犬は、5月にちなんでメイと名づけられ、みんなに可愛がられることになった。

放課後は、みんな部活に行くため、メイは、のんびりと散歩しながら耳をそばだてることにした。グラウンドの片隅にある花壇の三色スミレを眺めるふりをして、職員室の裏ドア前の階段にそっと丸くなった。職員室からは女性の甲高い声が響いていたが、何を言っているかはっきり聞き取れず、もやもやしていたところ、花壇の縁を作っている赤レンガに白いカラスがさっと舞い降りてきた。

驚いたメイは、とっさに顔を持ち上げ、じっとにらみつけた。白いカラスは、大きなくちばしをほんの少し開いて訊ねた。「おい君、見かけない顔だな。この学校に何のようだ。田舎ものじゃなさそうだな。どこからやって来たんだ」得体の知れない白いカラスに声をかけられたメイは、いつでも戦えるようにお座りをした。「君こそ、この学校で何をやっているんだ。白いカラスで～のは、初めてお目にかかったぜ。田舎ものでないことは確かだが、上から目線で言われては、答える気がしね～な」メイは、鼻をつんと上に向けた。

白いカラスは、首をかしげ、しばらく黙って考えた。この柴犬はただ者ではないと直感した白いカラスは、自己紹介をして、仲良くなることにした。「それは悪かったな。口が悪いのは、許してくれ。俺は、福島からやって来た風来坊さ。白いって～のは、俺も気に入らないんだが、しょうがね～のさ。放射能の内部被曝とやらで、生まれたときからこの有様さ。まあ、仲良くしようじゃないか」

メイは、しばらく考え、返事した。「僕は、昨日、東京からやって来たばかりで、糸島のことはまったく知らないんだ。よろしく頼むよ」メイは、この白いカラスから情報をとることにした。「へ～、東京からかよ。ご主人様は、転勤族ってわけだな。とんだ災難ってわけか。俺は気楽なものさ。風の吹くまま、あちこち旅をしているのさ。こちらこそ、よろしく」白いカラスは、暇つぶしの話し相手ができたと、ほんの少し嬉しくなった。

「ところで、君は物知りみたいだけど、この学校で面白い話はないかい？ちょっと前に、赤のTバックをはいた超ミニスカの先生に抱っこされて、頭をナデナデされたんだけど、あの先生、普通じゃないよね」この白いカラスがびっくりするような情報を持っているような気がしたメイは、まず、教師の素性を探ることにした。「物知りに見えるかい。それは光栄だよ。自分で言うのは何だけど、カラスの中では一番賢いと自負してるんだがね。例の超ミニスカの先生は、バーバラ先生と言って、生徒たちにとっても人気があるんだ。でも、淫乱だと思うけどね」白いカラスは、ドヤ顔で胸を張った。

「それじゃ、ここの教頭は、どんな感じだい。メガネをかけた陰険なインテリみたいだったけど」最も知りたい教頭について質問した。「ほ～、軍国主義者の才女ね～。教頭は、ちょっとした有名人だよ。九州帝国を建立し、女帝になるつもりだよ。この学校では、誰一人教頭に太刀打ちできるものはいないよ。でも、いずれ、CIAに暗殺されるんじゃないか。CIAに楯突くやつは、暗殺されているからな。ほら、ケネディー大統領が暗殺されたようにさ」白いカラスは、ホワイトハウスにも行ったことがあり、CIAと大統領の会話も盗み聞きしたことがあった。

メイは、CIAと聞いて心臓がバクバクし始めた。「知らなかったな～、CIAってそんなに怖いのかい？正義の味方と思っていたけどね。今の総理は、好かれていると思うかい？」メイは、CIAを信用してはいたが、白いカラスの話聞いて不安になった。「そ～だな～、大統領には嫌われてはいないと思うけど、暗殺されないという保証はないからな。TPPしだいじゃないか？君は、若いのに政治に興味があるとは、感心だ」白いカラスは、子供の柴犬の質問に感心した。

「そう、九州自治共和党の党首について知っていることがあったら、教えてくれないか？関東でも、謎の男として話題になっているんだが」白いカラスならば、何か知っていると思った。党首は、表に現れることはなく、街頭演説は、ほとんど幹事長がやっていた。党首は、いつも男装をしているため、誰一人、素顔を見たものはいなかった。「例の謎の人物か。残念だが、俺にも皆目見当がつかないよ。そんな、くだらない話はやめにして、水泳部でも見学したほうが楽しいぜ」白いカラスは、バーバラ監督のTバックビキニ姿をメイに見せることにした。



「遠慮しとくよ。犬かきは得意だけど、プールに放り投げられちゃ、たまんないからね」メイは、散歩しようと階段からぴよんと飛び降りた。「ちょっと待てよ。Tバックビキニを見たくないのか？何度見てもよだれが出るぜ。相棒、見ようじゃないか。ついて来いよ」白いカラスは、糸島市民プールに向かって飛び立った。メイは、Tバックビキニには興味なかったが、とにかく白いカラスの後を追って駆け出した。

水泳部は、男子が圧倒的に多かった。4月から、バーバラ先生が監督になったことで、一気に部員が増えた。部員数は、男子72名、女子28名まで膨れ上がり、練習もできないほどの部員数となってしまった。男子においては、サッカー部、野球部、テニス部などの部員が掛け持ちで入部してきた。理由はただ一つ、バーバラ先生のTバックビキニ姿を見るためであった。部員が多いため、女子は稲垣監督の下、学校のプールで練習し、男子は、バーバラ先生の下、市民プールで練習することになった。

部員たちは、バーバラ先生がTバックビキニで現れると、口笛を鳴らした。部員のほとんどは、Tバックビキニを見るのが目的で練習はいいかげんであったが、数人の部員は、練習熱心で、急激に記録を伸ばしていた。と言うのも、自己記録を更新したならば、ヒップタッチの特典が与えられたからだった。バーバラ監督のムッチリしたお尻を触れるとあって、色魔部員は、死に物狂いで練習に打ち込んだ。

バーバラ監督は、中高と水泳をやっている、平泳ぎが専門だった。練習においては、自ら泳ぎ、手本を見せた。バーバラ監督が泳ぐときは、部員は、水中にもぐり、息が続く限り足の開き方をじっと観察した。当然、部員の目は、股間に集中していた。われを忘れて股間に見入っていた部員の中には、鼻血を出したり、息を止めすぎて失神してしまう部員も出たほどだった。また、AED（自動体外式除細動器）を使って、奇跡的に一命を取り留めた部員もいた。

まったくさえないなかった水泳部が、一躍全国的に有名になった。新聞社や雑誌社までも取材にやって来たほどだった。それは、バーバラ監督のTバックビキニ姿の写真を撮るためだった。スポーツ雑誌の表紙にバーバラ監督のTバックビキニを載せると、飛ぶように売れた。当然、Tバックビキニは競泳用の水着としてふさわしくないと、教育委員会から指摘を受けたが、Tバックビキニのほうが、記録は伸びるといって、Tバックビキニをやめなかった。

500メートルほど白いカラスの後を追って走ったメイは、息を切らせて市民プールにたどり着いた。階段を駆け上がりプールに行ってみると、バーバラ監督一人が、大きく股を開きながら、プールの中央で平泳ぎをしていた。プールには、誰一人見当たらなかったが、バーバラ監督がプールの端にタッチした瞬間、キャップをかぶった頭が、一斉に水面から飛び出した。

メイは、びっくりして「ワン」と叫ぶと、みんなの顔がメイに向けられた。プールから飛び出してきたバーバラ監督は、笑顔でメイを抱きかかえ、「よくきたわね～」と頭を濡れた手でナデナデした。メイは、水滴が目に入り気持ち悪かったが、バーバラ監督の素肌に触れて、夢心地になった。部活が終わると、メイはバーバラ先生に抱きかかえられ、ブルーのコルベットで平原歴史公園横の下宿先に向かった。

バーバラ先生は、メイをさやかとアンナと亜季に紹介すると、今夜、自分の部屋でメイと一緒に寝ると伝えた。リビングでくつろいでいたシェルティーのスパイダーとキジ猫のピースは、始めて見る子犬を抱きかかえたバーバラ先生をじっと見つめていた。「メイは、スパイダーとピースのお友達になれるかしら？」バーバラ先生は、メイをフロアに下ろし、スパイダーとピースを手招きした。ピースは、ゆっくりとメイに近づき、なにやら挨拶をして、メイをスパイダーのところに案内した。

スパイダーがメイと挨拶を交わして、メイが笑顔を作ると、ピースとメイは、スパイダーの後を追って、スパイダーの部屋に向かった。部屋に入ると、ピースが、口火を切った。「東京からやって来たの。しばらく糸島にいるの？」ピースがメイに訊ねた。「ちょっと、いつまでいるかは、僕にもわかんないよ。でも、君たちと友達になれて嬉しいよ。この家の皆さんも、とても優しそうで、僕はラッキーだったよ」メイは、いつまでも糸島に居たい気持になった。

「関東って、放射能がいっぱいなんだろう。メイは、大丈夫かい？できれば、ずっと糸島で暮らせるといいね」スパイダーは、関東では放射能の内部被曝で甲状腺がんになる子供たちが急増していると言うニュースを聞いていた。「いや、そんなに騒ぐほどでもないんじゃないか。除染作業は、順調にすすんでいるし、ほら、東京オリンピックも開催されるって言うじゃないか。総理が言うように、まったく内部被曝は問題ないってことだよ」メイは、一瞬総理の気持ちになりかけたが、動揺を抑えて、総理を信じる一般庶民の気持ちで話をつないだ。

ピースは、目を丸くして話し始めた。「あら、メイってのんきね。関東のセシウムは相当なものよ。関東の人って、のんきと言うか、人がいいと言うか、田舎の九州人から見たら、理解できない人種だね。私だったら、さっさと、飛んで逃げ出すわ。内部被曝しながら生活するなんて、正気の沙汰じゃないわよ。メイ、ずっと、糸島に居なさい。ここに住めるように、私から、アンナにお願いしてあげるから」ピースは、あまりにも危機感のないメイにあきれ果ててしまった。

「ピースの気持ちは、ありがたいけど、僕は、総理を信じるよ。しばらくは、糸島に居るから、田舎のおいしい空気を吸って、思いっきり余生を満喫するよ」メイは、子供であることをつい忘れて、余生という言葉を使ってしまった。ピースは、ひげをピクピクさせて、笑顔で話した。「余生だなんて、メイったら、年寄りじみたことを言うわね。でも、関東と違って、糸島は、とっても空気がきれいでしょ。アンナもさやかも亜季もバーバラ先生もスパイダーも、みんな幸せよ」

メイは、バーバラ先生と一緒に暮らせるのなら、人間なんかに戻らなくていいと思った。犬になって人間のおろかさがしみじみと分かった。CIAに脅されて、国民を欺く総理なんて、辞めたくなった。でも、CIAに抗議する勇気もないし、逆らえば、暗殺されるのは目に見えてるし、総理なんてやりたくなかったのに。メイは、心の中でぼやいた。「メイ、なに考えているの？心配事でも有るの？困ったことがあったら、何でも相談してよ」ピースは、青くなったメイの顔を見て、声をかけた。

しばらく、メイは黙っていた。自分が総理であることを告白すべきか悩んでいると、ドアが突然開いた。そこには、笑顔の美しいバーバラ先生が立っていた。「いらっしやい、メイ、一緒に寝るわよ」バーバラ先生は、中腰になってメイを呼び寄せた。メイは、心の中で「バーバラ先生 バーバラ先生」と叫び跳んでかけていった。バーバラ先生にしっかりと抱きかかえられたメイは、全身から発散されるバラのような甘い体臭に包まれ、夢心地になった。

総理の寝室には、朝日が差していた。「あなた、いつまで寝ているの。今日は、大統領が来日する日でしょ。さっさと、起きなさい。なにが、バーバラ先生よ、夢でも浮気してるんだから」細君は、布団を剥ぎ取り、総理のお尻をぴしゃりと叩いた。「バーバラ先生！あ、夢か！」総理は寝ぼけ眼で、つぶやいた。

## 犬の夢

<http://p.booklog.jp/book/85509>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85509>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85509>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ